



60周年特別企画「岡大・知の系譜」シリーズ2

第六高等学校

特集

～不屈のエリートたち～

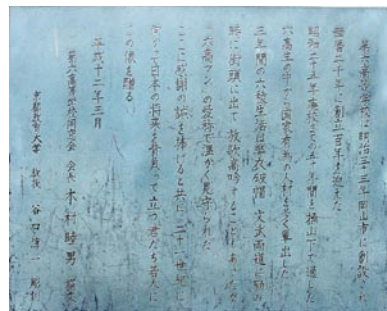
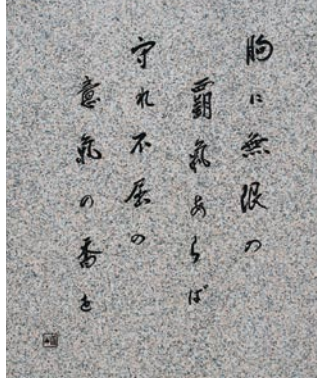
六〇周年特別企画「岡大・知の系譜」
シリーズ2として、
今回は本学のもう一つの源流、
旧制第六高等学校に焦点をあて、
その発展と戦後の新制岡山大学への
再生の過程を追う。



▲岡山駅東口に立つ「青春感謝」像



▲大正十二年当時の『六高マン』たち
(授業の合間に)



「青春感謝」の銅像に刻まれている『六高マン』の解説と、六高の応援歌「北進歌」の一節

岡山の誇り「六高」

岡山駅東口に立つ、「青春感謝」

と題された銅像をご存知だろうか。

これは旧制第六高等学校の創立百周年を記念して平成二二(二〇一〇)

年に建立されたもので、高下駄黒

マント姿のバンカラな六高生をイ

メージしたものである。銅像には「三

年間の六稜生活は 弊衣破帽 文

武両道に励み 時に街頭に出て放

歌高吟することもあつたが『六高

マン』の愛称で温かく見守られた」

との解説が刻まれている。また、右

側面には「胸に無限の覇気あらば

守れ不屈の意気の香を」という六高

の応援歌「北進歌」の一節が引用さ

れている。これらの文章から、誇り

高く、不屈の精神を持った「六高マ

ン」の姿が浮かび上がる。また、当

時の岡山の人々が、彼らを愛してい

たこと、そして「六高」を郷土の誇

りとしていたことがうかがえる。

旧制高等学校とは

では、それほどまでに岡山の人々に誇りとされた旧制六高とはどんな学校だったのだろうか。それを知るには、まず、当時の「高等学校」の位置づけについて知らねばな

らない。戦前の教育制度は、明治六

(一八七三)年の学制施行以降、さ

まざまな変遷をたどるが、基本的に

は義務教育は尋常小学校のみであ

り、中等教育機関として高等小學校・

中學校が存在した。そして大学への

予備教育機関として整備されたのが

高等小學校である。戦前の教育制度

は、現在と違って複線型であり、把

握しにくい、高等学校尋常科には

一二歳から四年間在学し、高等学校

高等科には一六歳から三年間在学

するのが一般的だった。従って、大

学(三年制、医学部は四年制)に入

学するのは、早くても一九歳を過ぎ

てから、となる。

「大学への予備教育」といっても、

戦前の高等学校は現在の「高校」と

は異なり、大学受験のための教育を

行うものではなかった。明治初期の

大学では、教師はほとんどが外国人

であり、授業も外国語で行われた。

当然、大学に入ってから外国語を学

んだのでは間に合わない。そこで外

国語をはじめとする大学予備教育

を行うために整備されたのが高等

学校である。現在でも大学一年・二

年においては一般教養の教育を行

うが、それに相当する高等教育を行

うものであった。また、前号で第三

高等学校(京都)の医学部が岡山に

設置されたことを紹介したが、当初

各高等学校にはいくつかの専門学

部が存在し、大学予備教育を行う大

学予科とともに、専門教育を行う準

大学としての性格も有していた。

しかし、政府は明治三十

(二八九七)年、京都帝国大学の設

置によって、高等教育を大学の拡充

によって行うという構想を示し、こ

れ以降、高等学校は大学予科に純化

していく。第六高等学校はこのよう

な方向が確定した後最初に設置

された、いわば新構想の高等学校の

第一号である。

第六高等学校の成立

戦前、番号を付された高等学校

は、第一(東京)、第二(仙台)、第

三(京都)、第四(金沢)、第五(熊

本)、第六(岡山)、第七(鹿児島)、

第八(名古屋)と八校存在した。こ

れらは「ナンバースクール」と通称

され、ほかの高等学校とは格がちが

うとされていた。

これらナンバースクールは戦後、

それぞれ東京大学、東北大学、京都

大学、金沢大学、熊本大学、岡山大

学、鹿児島大学、名古屋大学へと再編されることとなる。

明治三一(一八九八)年、第

一三回帝国議会において高等学校

一校増設が決議されると、岡山県・

広島県・愛知県・香川県がその誘

致活動を熱心に行った。とりわけ

岡山・広島県のあらそいは熾烈を極

め、国会議場の外で代議士がつか

みあいになったというエピソード

が残っているほどである。かくの

ごとき熾烈な戦いを勝ち抜き、岡

山に高等学校が設置されることと

なった。

第六高等学校の設立は明治三三

(一九〇〇)年。入学志願者三三八

人、うち一二九人が入学。入学志

望者は全国にわたっており、明治

三六(一九〇三)年のデータでは、

地元岡山県人は三一人で二位(一

位は東京府の四五人)、入学者の

二〇・五パーセントに過ぎず、全国

の英才をあつめていた。

「大正から昭和にかけての時期に

は、自由と自主の伸び伸びとした

伝統と広い教養を身につける学風

が成長し、このことで学んだ若者

たちは帝国大学などで専門的学問

を学び、各界のリーダーとなって



◀理学部棟前に設置されている
「日本の現代物理学の父」
仁科芳雄博士の胸像

いった」(岡山大学五十年小史)という。

六高はスポーツが盛んなことでも有名だった。二三の運動部がインターハイにおいて、のべ五五回の全国制覇をなしとげている。とりわけ柔道部は高専大会八連覇という偉業を達成、その勇名を全国にとどろかせた。この六高の柔道場からは「三角締め」など今でも格闘技で使用される多数の寝技が編み出されたといわれている。

第六高等学校の人々

では、第六高等学校はどのような人々を輩出したのだろうか。

六高出身といってまず想起されるのが、「日本の現代物理学の父」**仁科芳雄**(明治二三(一八九〇)年～昭和二六(一九五二)年)である。仁科は理化学研究所所長となり、日本の理論物理学の発展に寄与した。後進の指導にも力を入れ、**湯川秀樹**、**朝永振一郎**といった、のちのノーベル物理学賞受賞者たちを育てた。現在、物理学で優れた業績をあげた個人・団体に、「仁科賞」が贈られることとなっていることから、仁科の理論物理学

に残した足跡の巨大さが見てとれる。また、仁科は戦後、本学理学部の創設に尽力したが、その功績を称えるべく、胸像が理学部棟前に設置されている。

文学方面では、**内田百閒**(明治二二(一八八九)年～昭和四六(一九七二)年)が有名である。百閒は夏目漱石の弟子であり、大正から昭和にかけて作家として活躍した。「阿房列車」シリーズなど、独特のユーモアに満ちたその随筆はいまでもファンが多い。近年では、その晩年が映画監督・黒沢明により映画「まあだだよ」に描かれたことでも知られている。

そのほかにも、中国の政治家・文人として有名な**郭沫若**(一八九二年～一九七八年)も六高の卒業であるし、「月に吠える」で有名な詩人・**萩原朔太郎**(明治一九(一八八六)年～昭和一七(一九四二)年)も一時期、六高に在籍していた。政界では、**安倍晋三**・元総理大臣の父親であり、外務大臣や通商産業大臣を歴任した**安倍晋太郎**(大正一三(一九二四)年～平成三(一九九二)年)などがある。財界でも、クラレの社長で、大

原美術館の振興や社会貢献事業を行った**大原總一郎**(明治四二(一九〇九)年～昭和四三(一九六八)年)など錚々たる人材を数多く輩出している。

そして、忘れてはならないのが六高を卒業し、のちに第九代の六高校長となった**黒正巖**(明治二八(一八九五)年～昭和二四(一九四九)年)である。

黒正巖校長による

第一七師団跡地「占拠」

戦後、日本政府は新制大学構想を発表し、中国地方に総合大学を設置する計画を提示した。設置地として広島が有力視されるなか、岡山に総合大学誘致に向けた強い気運が盛り上がり、六高設立時と同じように、ふたたび岡山と広島の間をめぐってはじまる。

岡山は、誘致推進のため、商工経済界、弁護士会などさまざまな団体が結集した「設立期成会」を結成。政府への陳情、誘致賛同の署名運動などの活動を行った。活動資金や用地獲得などに要する地元負担金はすべて県民の寄付金によってまかされた。各自治体や産業界、そして

一般県民からの寄付により、当時の金額で三億数千万円の募金を達成。当時開学した新制大学の中で、地元負担金を予定通り完納したのは本学だけであつたという。

こうした実績と熱意が認められ、岡山・広島いずれとも決めがたくなつた政府は、一県一大学設置の方針を転換し、岡山・広島両県に総合大学の設立が実現する。

総合大学を誘致する運動においては、岡山市に大学誘致の候補となる広大な敷地が存在したことがきわめて有利な条件としてはたっていた。この敷地の確保こそ、当時の六高校長・黒正巖の努力に負うところが大きい。

黒正は農業経済学の大家として知られ、六高卒業後、京都帝国大学農学部教授などをへて、昭和一九(一九四四)年、母校六高の校長に就任した。

六高は昭和二〇(一九四五)年六月の岡山大空襲と失火により、校舎の大半を焼失した。昭和二二(一九四七)年には校舎が復興されたが、その校舎はあまりにも手狭であり、新校舎の建設が望まれていた。

第六高等学校 特集

～不屈のエリートたち～

【参考文献】

「岡山大学五十年小史」（岡山大学創立五十周年記念事業委員会）

「学制百年史」（文部科学省）

「岡山県立図書館郷土資料班 展示リスト 郷土の歴史を学ぶ」Webサイト



▲上：旧事務局棟（第一七師団の司令部の庁舎）

下：通称「赤レンガ」工学部15号館（旧陸軍兵器補給廠岡山支廠炊事場）

ちようどそのころ、岡山に総合大学を誘致する運動が起こっており、黒正校長は岡山市津島の旧陸軍第一七師団跡地を大学敷地とする構想を抱いていた。この地域は、日露戦争後に津島一帯の水田地域をつぶして整備したもので、八三万坪という広大な敷地に、日本陸軍第一七師団が練兵場や兵舎を置いていた。そしてこの広大な敷地と建物は戦

災の痛手をほとんど受けなかったため、敗戦直後から進駐軍に接収されていた。昭和二三（一九四七）年、この第一七師団跡地が大蔵省に返還される。大蔵省からは、この跡地を大学用地として使用してよいとの内諾を得ていたが、大学開設まで放置しておけば、戦後の混乱期でもあり、敷地や建物が荒廃することは目に見えていた。

そこで、黒正校長は六高生二五〇名を率い、跡地を「占拠」。「第六高等学校分校」の看板をかかげた。岡山県立農専の応援も得て、六高の学生教職員が徹夜で警備にあたった。これにより、新制・岡山大学は敷地二五万坪、建物五万坪という広大な津島キャンパス（当初、敷地面積は北海道大学につぐ国立大学第二位の広さといわれた）を確保できたのである。

このエピソードはまさに、敗戦という苦難を学校飛躍のチャンスに変えた、六高マンの不屈の精神が発揮された事例であるといえる。

新制・岡山大学の誕生

昭和二四（一九四九）年十月二十二日、新制・岡山大学の開学祝賀式が盛大に挙行された。しかし、この場に黒正の姿はなかった。黒正は大学認可を目前にして大阪経済大学学長に就任し、岡山を去っていた。そして、昭和二四（一九四九）年九月、新制・岡山大学の誕生を見ることがなく、脳溢血で急逝していたのである。

黒正は、岡山大学創設にあたり、津島キャンパス確保のほかに、組

織編成・人事などで多大な貢献を行った。これを称え、現在、本学のシンボルである時計台の前に黒正巖像が建立されている。

また、卒業式において各学部・研究科の成績優秀者に「黒正賞」を授与しているが、これも氏の功績にちなむものである。

不屈の精神が生んだ岡山大学

開学から六〇年が経過したが、今でも津島キャンパスでは、旧軍施設の名残を見ることができる。たとえば、本部棟の隣にある旧事務局棟は第一七師団の司令部の庁舎として建設され、本部棟建設まで事務局として使われていたものである。また、工学部一五号館は、「赤レンガ」と通称されるレンガ造りの建物であるが、これは旧陸軍兵器補給廠岡山支廠炊事場として使われていたものである。

これらを見るたびに、本学創設にかけた六高マンの不屈の精神が伝わってくる。

その精神を脈々と受け継いでいることに、自信と誇りを持ち続けた